
あなたとわたし オレときみ

咲蘭華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたとわたし オレときみ

【Nコード】

N16410

【作者名】

咲蘭華

【あらすじ】

FF7の色々なカップリングで小説を書いていきます！

基本、クラエアが多いんですが、苦手な方は右回れ右ツツをオススメします。

そして…（前書き）

前回投稿した回の続きです♪今回はエアリスとティファのお話です♪（GL、BL要素は一切ありません。）

そして…

side：エアリス

わたしがクラウドと忘らるる都であって、クラウドからある提案が出された。

「エッジで2人で一緒に暮らそう。」

って。

だから、わたし達はエッジへと向かった。

そのついでにわたしは一番会いたかった人に会いたい。そうクラウドに告げた。

それを聞いたクラウドはやさしく微笑んでくれた。

「着いたぞ。ここがティファのセヴンスヘヴンだ。」

「ここが…」

「メテオ災害のおかげで昔の店は壊されてしまっただけ。今はここでやっている。」

「そうなんだ…」

「行こう」

「うん。」

全く知らない町、エッジ。

ミッドガルがメテオ災害のせいで半壊してしまった後、ミッドガル住民が臨時の町を作るために、ミッドガルのスラムにあった木材などを集め、作った町だ。

「ただいま…」

「ちよつと！クラウド！今までどこに……！！！」

「あーあ、またティファに怒られる……あ！」

「久しぶり」

わたしが少し控えめに2人にそういった。

出迎えてくれたのは、ティファとマリンちゃんだった。

「エアリス……？エアリスなのね？」

「…ああ、本物だ。」

「お花のお姉ちゃん！」

マリンちゃんがわたしに飛びつく。

「本当にエアリス……？偽者じゃないよね……？」

ティファが今にも泣きそうな顔でわたしに近づいてくる。

「うん。ホンモノだよ。…ただいま。ティファ」

「…っ！」

ティファはわたしに抱きつき、泣いてしまった。

クラウドは「やれやれ」という顔つきだったが、そんなクラウドも人のことは言えないと思った。

だってクラウドだってわたしと再会したとき泣きそうな顔してたもの。

っていうのは内緒。

「おかえりっ…おかえりなさい！」

「ただいま…ティファ…」

わたしのためにこんなに泣いてくれたティファがすごく嬉しかった。

とても胸が温かくなっていく気がした。

それからわたしとティファは2人で一回話したいから、そばにある公園へ向かった。

「……」

「……」

お互いに沈黙が続く。

けどその沈黙も嫌な沈黙ではなかった。

旅をしていた頃、恋のライバルでありながらわたしの大親友だったティファ。

きつとティファもわたしと同じことを思っていると思う…。

そして先に口を開いたのはティファだった。

「…わたしズルイよね。」

「？」

「エアリスが帰ってきてくれてとても嬉しいのに…心のどこかで残念なの。」

「ティファ…」

わたしもティファの立場だったら、きっとそう思っていると思う。
だって…クラウドがすきだから。

「ごめんね…エアリス。だけど…やっと分かったんだ。」

「？」

「クラウドは…エアリスじゃないとダメみたい。」

「え…？」

ティファから帰ってきたのは意外な返事だった。
どうということ…？

「メテオ災害が終わって、この町で暮らして…クラウドはわたしの
店で「ストライフデリバリー」をやっている中で…いつも…いつもエ
アリスのいた教会に行くの。ときには帰ってこない日も。」

「それで…本当はわかっていたの。クラウドがエアリスを求めている
っていうこと。」

「ティファ…」

「だから、もう私の入るスキなしってことだね！」

ティファがふっきれたカンジでわたしにそういった。

「でも…ティファだって…ずるい！」

「え？」

「わたしがあの時、セフィロスに擬態したジェノヴァに殺された後
…クラウドがおかしくなっちゃったでしょう？その時ティファとク
ラウドがライフストリームの中に入ったとき…はつきり言って助け
に行こうとしたの。」

そう、ライフストリームからずっと見守り続けてきた。みんなの

ことを。

ずっとクラウドを助けてあげたい。そう思っていた。でもそれはなかなか難しいことで…

そう考えているとき、2人がライフストリームに入ってきた。だからクラウドを助けに行こうとしたらザックスに止められた。

『今のクラウドを助けられるのは、幼馴染のティファしかない。』

「…そうザックスに言われたの。」

「そうだったの？」

「その時思っただ…クラウドはティファがいるから平気…なのかなって」

「でもエアリスは帰ってきた。」

「うん…だってクラウドがすきだから。」

だって…まだ、クラウドに「スキ」っていう気持ちすら伝えていないんだもの。

「そして、クラウドはエアリスを選んだ。」

「ティファ…」

「そか…じゃあしょうがないね。私、引き下がるしかないよね。だって…クラウドのあんな幸せそうな顔見たことないもん。」

そしてティファがわたしを抱きしめ…

「幸せになってね。」

「！」

その今にも消え入りそうな声はどこかわたしを不安にさせた。
今にもティファがわたしの目の前から消えてしまいそうで…

「じゃあ…ね」

「ティファ！どこ行くの！？」

わたしがティファの腕をしっかりとつかむ。

「やっぱり私まだ辛いから…心の整理がついてからまた合おう？」

そういつてティファは去っていつてしまった…。

でも、きつとまた昔みたいに帰れる。そう希望をかけていた…。

side：ティファ

「よお、ティファ」

わたしが公園から去ろうとしたとき、巨漢がわたしの目の前に居た。

「バレット…」

その巨漢は炭鉱から帰ってきたばかりのバレットだった。

「お前も大人になったんだな。」

「聞いてたの？」

「まあな」

「…っ」

それを聞いたとたん急に涙が出てきた。

そしてバレットに抱きついて子供のように泣いた。

でも、不思議とそこまで悔しかったり、哀しかったりしなかった。きつと自分でもわかっていたんだと思う。

泣いた後の私の心は今日の空みたいに澄んでいた。

また…（前書き）

前に一回投稿したのですが、失敗しちゃって…再投稿です。

また…

エアリスが忘らるる都で死んで、オレがライフストリームに落ちてメテオを防いで…そして世界がやっと落ち着きを取り戻した頃。オレはふと思い出した。

―エアリスのいた教会に行ってみよう。

そう思った。だから行ってみた。

「まだ…エアリスがここにいるみたいだな。」

ここはエアリスと2回目に再会した場所。

ここでエアリスは花を育てているらしい…。

そして、ここを見るとあの日の記憶が鮮明に蘇る。

エアリスがセフィロスに擬態したジェノバに殺される夢。

オレはあの時、エアリスの目の前にいたのに…なのにオレはエアリスをみすみす殺すようなことをしてしまった。

オレは…エアリスにひどいことをしてしまった。

もう一度、エアリスが眠っているあそこへ行こう。

オレはバイクを走らせた。

忘らるる都に着いたオレは早速、エアリスがいる泉へ向かった。

「オレは…本当にこれでよかったのだろうか。」

オレは目の前で大切な人をなくしたのに、自分のことで命いっばいでエアリスの死なんて重要視していなかった気がする。それにティファにもずっと迷惑をかけていた。

「オレは…エアリスに許してもらえたのだろうか。」

そう悩んでいると…

「また！そんなことばっかり考えてる。」

「！」

オレの背後から声が聞こえる。

温かくて包み込むような…オレの一番会いたい人の声が…

「エ…エアリス…」

「言ったでしょう？全部終わったら…って」

「っ！」

オレはエアリスの元へと駆け寄り、抱きしめた。

それに応えたようにエアリスがオレの背中へと手を回す。

「会いたかった…！ずっと…エアリスに…！」

「わたしも…ずっと待ってた。来てくれると信じていた…」

オレたちは今まで会えなかった時間をうめるように抱きしめあった。

そして何をしなくともオレたちは寄り添い合っていた。
そして先に口を開いたのはエアリスだった。

「きつとミンナに怒られちゃうね。」

「そうだな…バレットあたりが一番…かもな」

「ふふ…ティファにも怒られそう。」

「…けど、みんな喜ぶだろう。またエアリスにあえて。みんなエアリスに言いたいことがいっぱいあると思う。」

「クラウドも？」

そう聞かれて、オレはしどろもどろになる。

「お、オレは…／／／」

「ないの？」

エアリスがオレを覗きこむ。

エアリスが死んで、オレがやっと自我を取り戻してやっときついたこのキモチ。

もう…彼女が消えてしまう前に、オレが後悔しないように。言うことにしよう。

「…わたしは、あるよ。」

「え？」

言おうとしたら、エアリスにさえぎられた。

「クラウドにずっと言いたかったこと。」

「……」

「わたし…ずっとあなたが……」

「好きだ。」

オレは耐えられなくなって、エアリスが言う前にオレが言っ
てしまった。

そしてそつとエアリスを抱きしめた。

「…わたしも！」

もう、絶対にこの花を離さない。
オレはそう胸に誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1641o/>

あなたとわたし オレときみ

2010年10月10日01時51分発行